

確かな学力をもとに、思考力・判断力・表現力を高め活用する指導法の研究

十島村立宝島小・中学校

1 研究のねらい

本校の児童・生徒は、中学卒業後、多人数の集団で学習していくこととなり、生活の状況も一変する。このことから、育成すべき資質・能力として「未知なる状況に対応する力」を育むことに重点をおいて研究を進めてきた。特に「主体的・対話的で深い学び」を軸とした指導法改善に組織的に取り組んできた。昨年度、「基礎基本の確実な定着」を基に、授業設計において「思考力・判断力・表現力を活用する場面」を確実に設定する共通実践を行った。また、授業研究の在り方を改善し、「子どもの学びの姿から授業を見取る」ようにし、「主体的・対話的で深い学び」を具現化する指導法改善を進めてきた。その結果、教師による個に応じた指導法の工夫・改善が授業研究等を通じて共有され、組織的に指導力向上が図られている。また、児童・生徒は諸調査において、思考・表現を問う問題に対する正答率が向上した（資料1）。

	思考・表現の正答率	
	令和元年度（中2）	平成30年度（中1）
生徒A	100%	87.5%
生徒B	62.5%	12.5%

資料1 鹿児島学習定着度調査（社会）の推移

このことから、今年度の研修を昨年度からの研修テーマの第二年次とし、さらに充実・深化させる研修に努めた。特に「主体的・対話的で深い学び」を手段とし、個の力を伸ばすための指導法改善を積極的に推進する必要があると考えた。

2 研究の概要

令和2年度研究テーマ 確かな学力をもとに、思考力・判断力・表現力を高め活用する指導法の研究	
研究仮説Ⅰ 各教科において習得した思考力・判断力・表現力を、関連付けて課題解決に活用する学習活動に取り組むことで、思考力・判断力・表現力を一層高めることができるであろう。	研究仮説Ⅱ 個の実態を的確に把握し、9か年を見通した計画的な指導を行うことで、個に応じた力の伸長が図られるであろう。

本校の特色である小・中併設校の強みを活かし、校種の垣根を越えて各授業において思考力・判断力・表現力の育成場面を明確にした指導法の在り方を追究していきたい。そのために、児童・生徒の状態を的確に把握し、個に応じた学習指導について研究を進める。

3 研究の内容

(1) 各教科等における指導法の改善

- ア 「主体的・対話的で深い学び」を軸にした授業の積極的な展開
- イ 学びの姿から見取る授業研究の充実
- ウ 新学習指導要領全面実施（移行措置）の確実な実施
- エ 学力向上支援 Web システム問題、今週の一問、過去問を活用した学力の定着
- オ 各教科、特別の教科道徳、特別活動の指導法・評価の研究
- カ 小中の系統性を見通した指導法改善

(2) 個に応じた指導の工夫・充実

- ア 個人カルテによる学力把握と系統的・横断的指導
- イ 特別活動の指導の充実
- ウ 「総合的な学習の時間」を要とした系統的・横断的指導
- エ キャリアパスポートの活用・研究
- オ 「書くこと」を通じた言語活動の充実と表現力の育成

4 研究の実際

学校全体で「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けて、授業力向上を目指す校内研修の運営を推進していく必要があると考え、以下の手立てを行った。

(1) 学びの見取りによる研究授業

各授業者が授業のねらいや柱を明確にするため、事前に指導案検討研修を行った。実際の授業では、参観する教師をグループに分け、それぞれのグループ内で「特定の児童・生徒の様子を観察、記録する」などといった役割分担を行った。その役割分担を基に、研究授業において、教師の発問や指示に対して、児童・生徒の学びが活性化されていたか記録を取った(資料2)。また、前回の反省がその後の授業で活かされ、児童・生徒がどのように変容したのか検討できるよう教師の役割やグループを固定し、継続的な研究授業を行った。授業研究では、ワークショップ型のグループ協議を実施し、「学びの見取り」の記録から「児童生徒の学びの活性化や停滞した原因」について各グループ内で検討を行った。その他にも、本村では、免許外の教科を臨時免許で指導する場合があります、また、経験年数が浅い教員も多く在籍している学校もあるため、本校ではTV会議システム活用して研究授業を積極的に公開し、村全体の指導力向上に寄与するよう努めた。



児童・生徒の学習活動の様子を記録

授業記録・分析シート(観察対象児童・生徒学習状況記録票)		記録者:
教師の働きかけ・働き		観察メモ
1	リーダーへの役割分け	11-2=9
2	みんなの役割を分ける	10-2=8
3	みんなの役割を分ける	8-1=7
4	みんなの役割を分ける	
5	みんなの役割を分ける	
6	みんなの役割を分ける	
7	みんなの役割を分ける	
8	みんなの役割を分ける	
9	みんなの役割を分ける	
10	みんなの役割を分ける	

資料2 「学びの見取り」について

(2) 専門性を生かした乗り入れ授業の実施

中学卒業までの9か年を見通した指導では、個人カルテを活用し、職員全体で児童・生徒の状態について個別の課題を共有した。また、小学3年から中学生まで専門性を生かした乗り入れ授業を実施し、各教科担任と担任との連携を密にし、明確になった課題に対して、個に応じた指導を展開した(資料3)。

学年	乗り入れ教科
小学3年	理科・外国語活動
小学5年	国語・算数・理科・外国語
小学5年(特別支援)	国語・算数
小学6年	外国語
中学	音楽

資料3 乗り入れ授業一覧

5 研究のまとめ

(1) 成果

児童・生徒の実態に沿った指導法が継続的に検討され、小学校低学年複式授業でのリーダー学習など、多くの実践を共有することができた。児童・生徒の「主体的な学び」が具現化されていた。実際に、諸調査では、思考・判断・表現を問う問題に対する正答率について、学年が上がるにつれ、より上昇する傾向が見られた。

(2) 課題

本校は、極小規模校のため、児童・生徒が多様な意見や考えに触れる経験が不足している。そのため、思考して問い続けるなどの「対話的で深い学び」の指導法について、研究を積極的に進め、工夫・改善を図る必要がある。

6 今後の取組

本村では、TV会議システムを活用した合同授業が積極的に行われ、その有効性についても村の合同研修会等で取り上げられている。今後、当システムを活用し、各教科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導や評価の在り方について研修を深め、児童・生徒の資質・能力をより高める指導法について研究していく考えである。